

研究会名「IS技術者のためのPsytech研究会」

第5回会合：“IS技術者のやりがい”パターンランゲージの作成ワークショップ

日時：2019年5月25日（土）12時20分～13時10分（シンポジウム同日開催）

場所：専修大学 専修大学神田校舎 7号館7階773教室

使用したプレゼン資料：

- ・PPT：プロジェクト計画書“IS技術者のやりがい”パターンランゲージの作成
- ・PPT：ISマネージャのためのパターンランゲージ案（5/25版）
- ・模造紙：メルマガ原稿からKJ法で整理したもの（3/12版）
- ・模造紙：抽出したパターン名（案）

参加者：会員9名、非会員2名

まとめ

1. プロジェクト計画、パターンランゲージの目的や検討中のパターンランゲージ案を提示した。
2. 抽出したパターン名、一部のパターン、そして「ぼやき」「セルフコーチング」の2つのパターン（「状況」「問題」「解決策」の構成により整理した）のコンテンツについて議論・検討を行った。参加者から、パターンの表現としての整合性や、全体ストーリーについての課題が指摘された。
3. 今後の検討事項としては以下の通り
 - 1) 本日の議論を元に、パターン抽出、整理のワークを進める。
 - 2) 全体ストーリーとして、ESO 行動規範を参考に進める。
 - 3) 1)（可能なら複数回ワークする）、2) の後で、パターンランゲージ案を提示して、参加者の意見を聞く場を設定したい。一部のパターンは賛助会員の研修として使用することを検討する。

議論メモ

- 1) A氏：「ぼやき」にはいろんなものが混じっている。ぼやきの定義が必要で、他のケース、他との関連もあるのでは？
- 2) B氏：プロジェクトマネジメントには、メンタル以外に2つのプロセス、マネジメントそしてエンジニアリングがある。プロセスをケース別に整理し、（メンタルプロセスで全てカーバするわけではなく）ある部分はマネジメント、エンジニアリングを参照することになる。
- 3) C氏：ぼやきの定義は何か、感覚、シチュエーション別に整理する必要がある。包含する関係が逆ではないか。大小混じっているし、ツールとして整理が必要ではないか。
- 4) A氏：ぼやきが観測できる状況、報告された状況など見えるものから現象として捉え、対応する解決法がある。枠組みや指針はあるのか。お題がしっかりあれば（いいと思うが）。沢山あるパターンから抽出してメッセージをまとめると、納得性の高いものとなると思う。そうすれば、ツールとして寄り添えるものとなる。
→三村：そんなに精緻なものは目指していない。標準、精緻な例としてはESO 行動規範がある。全体のストーリーはまだみえてきていない。KJ法で整理していて、まだ見えず独りで悶々としているところ。（ここで、井庭研究室のプレゼンテーションパターンのストーリーを紹介した）
- 5) A氏：見た目で見えないこと、意欲などはどうか？

- 6) C氏：ぼやきは表面上のことで、実際にはこういうことという想定もできる。紐解いていって、KJ法とパターンを何度も整理することで、ストーリーが見えていくのでは。網羅性はどうか。解釈もさまざまできる。
- 7) 別の状況があって、それぞれのぼやきが定義され、明確になっていく。少し大きい目で捉えて事象を捉える必要がある。メンタルの現象として見えるもの、理由の構造で捉えるのはどうか。
- 8) 個人差の解消をどう検討するか。「ぼやき」の категория ができていく。
- 9) B氏：WBSには近づきたいが、まだ検討不足。
→三村：標準化のようなもの ESO 行動規範に示されたように、ルールや運用、事例など含めたものを求める、そういった気持ちは理解できる。今回のパターンランゲージは標準ではなく、例えば対話において、今ここにいる子どもと私ではこの位置で座っているのが心地よい空間であるが、これが別の人であれば近すぎると思う。上司と部下の関係性や対話するテーマにあわせて2人が話しやすい雰囲気を作る。臨床心理学ではフォーカシングという技法があり、それぞれがいい感じだと考える座る位置を2人の関係性から探っていくことを実際にやってみる。実際に企業で個人面談の場面では、殆どの方が対面(180度)で座ろうとするが、90度で座ってもらって話を聞く。上司部下の関係性によっては、平行に横に並んだ方が話しやすいことも考えられる。このことをカスタマイズ、テーラリングと考えるかどうか。
- 10) D氏：誰の誰に対するぼやきなのか、ぼやきにも積極的な形のものもある。なぜぼやきとみたのか、解決策があるのかどうか。
- 11) E氏：どういう形で使って活用していくのか。
→三村：日頃の対話のヒントとして IS マネージャが活用する。研修で用いて、グループで討論するなど。
- 12) B氏：ESO 行動規範に6つの基本的な考え方があり、それば参考になるのではないかと。→ここで ESO 行動規範の6つの考え方を紹介。
- 13) C氏：いくつパターンができるのか。
→三村：「旅のことば」では、60%の納得性を目指したと講師の岡田氏は語っていたので、今回は60%とはいかなくても、40%とか50%くらいの納得性が得られればよいと思っている。パターン数としては、岡田氏は10では少なすぎる、50以上になると多すぎて扱いはづらくなるということなので、30くらいになると思う。
- (14はワークショップ終了後の指摘、重要と思われるので記録する)
- 14) (パターン名：セルフコーチングに対して) E氏：「自己成長」がパターン名としてふさわしく、セルフコーチングは教科書的なタイトルではないか。

以上